〔原 著〕

他者共在が不安反応に及ぼす効果

— SOCIAL ANXIETY についての実験的研究 (1) —

横 山 博 司 坂 田 桐 子 黒 川 正 流 生 和 秀 敏
徳山大学 広島大学 広島大学 広島大学

The Effect of the Presence of Another on the Anxiety Response — The experimental study about social anxiety (1) —

HIROSHI YOKOYAMA (*Tokuyama University*) KIRIKO SAKATA (*Hiroshima University*)
MASARU KUROKAWA (*Hiroshima University*) HIDETOSHI SEIWA (*Hiroshima University*)

The purpose of this study was to discuss the following hypothesis: In the presence of another person, if the subject is in a state of subjective self awareness in which she can take herself to be an subject, her anxiety will decrease. On the other hand, if she is in a state of objective self awareness in which she will take herself to be an object, her anxiety will increase.

Subjects were one hundred ten female university students. The stimuli arousing anxiety were a horror video and a pornographic video. They were divided into the next four conditions for each stimulus. 1. Observed condition: Subject's face was observed under the anxiety arousing situation through the monitor television by another. 2. Observe condition: Subject could observe the face of another through the monitor television. 3. Co-presence condition: Two subjects watched the video in a room which was partitioned by a screen. 4. Alone condition: The subject watched the video alone.

The anxiety level during the anticipation period was measured by the heart rate as the physiological measure and simplified AACL as the subjective measure.

The results were as follows. 1. The anxiety level was not affected by the mere presence of another but by the difference of the situation of both subjects decided by the style of the presence of another. 2. The presence of another decreased her anxiety when the subject is in a state of the subjective self awareness in which she could observe another, but it increased her anxiety when the subject is in a state of the objective self awareness in which she was observed by another. 3. Aroused emotion varied, depending on the difference of the threatening stimulus or the threatening situation, and the qualitative difference of emotion affected, the anxiety level under the observed condition.

Key words: 1. anxiety 2. the presence of another 3. subjective self awareness 4. objective self awareness 5. horror video 6. pornographic video

問 題 と 目 的

不安な気持ちを抱いている時には、誰かが一緒にいてくると、それだけで随分気分が楽になったり安心できたりする場合が多い。しかし、一方、他者の共在が、かえって不安や緊張を高め、一人にしてほしいと思うよう

なこともしばしば体験する。このような他者共在の不安に及ぼす効果の違いを生じさせる理由の一つとして、自分の意識や注意が相手に向けられているか自分自身に向けられているかという「注意の方向性の違い」が考えられる。

Sartre (1943) は、「対自存在」である自分が、他者の

眼差しによって「対他存在」に変えられたとき、その人は自由が奪われたと感じ、不安におののくようになる」と述べている。事実、他者にみられている自分の姿に注意を向けると、理想と現実のズレを強く意識するようになり、そのため、自尊心の低下・不快感・行動の混乱などが生じやすいという報告は多い (Ellsworth, Carlsmith & Henson, 1972; Liebling & Shaver, 1973; Ickes, et al, 1973; Innes & Young, 1975; Zimbardo, 1977; Greenbaum & Rosenfeld, 1978; Strom & Buck, 1979; Fenigstein, 1979)。

この問題について Duval & Wicklund (1972) と Wicklund (1975) は、意識の状態を主体的自覚 (subjective self awareness) と客体的自覚 (objective self awareness) の2つに分けることで詳しく検討を加えている。主体的自覚とは、意識の対象や注意の焦点が自己から離れて外界に向けられており、自己を行為の主体として感じている状態である。これに対して客体的自覚とは、注意の焦点が自分自身に向けられており、自己を意識の客体としてとらえている状態を指している。何らかの条件によって客体的自覚の状態になると、望ましい自分の姿を比較の基準にして現状の評価がなされ、理想と現実のズレに気づくようになる。このズレが不快感を生じさせ、そのような状態から逃避したり回避したりする行動を促すようになると考えている。Duval & Wicklund (1972) は、客体的自覚を引き起こす状況として、鏡や写真で自分の姿を見たり、テープ等で自分の声を聞くほかに、他者が自分を見ていることに気づくことを挙げている。

Buss (1980) は、更に、客体的自覚を私的自覚 (private self awareness) と公的自覚 (public self awareness) とに分けている。私的自覚とは、自分自身に注意を向ければ、いつでも感じ取れる自分についての意識で、体調や感情など自分の内面的な側面に気づくことであり、基本的には経験しているその本人だけが感じることでできるものである。これに対して公的自覚とは、自分の言動や外見などの他者の目に曝されている自分の姿に注意が向けられた状態である。Buss (1980) は、他者共在によって引き起こされるのは公的自覚であり、この公的自覚こそ対人不安を感じさせる主要因であると考えている。公的自覚が強いほど、自分に対する他者の反応が気になり、他者により印象を与えようとする事への動機づけが増大し、それがまた一層公的自覚を高めることになる。この点は、自己呈示理論と対人不安との関連を論じている Schlenker と Leary (Leary, 1982, 1983; Leary & Schlenker, 1981; Schlenker & Leary, 1982) の主張と

も一致している。また、Schwarzer (1986) は、評価懸念の高い人は自分を社会的客体として見つめがちであり、日常場面においても、他者の目を意識して行動する傾向が強いと述べている。このように、客体的自覚、とりわけ、公的自覚が対人不安を高める要因であるとする、公的自覚を強める他者の共在が不安増大の方向に機能する可能性は十分考えられる。

主体的自覚の不安低減効果については必ずしも明らかではない。しかし、Schachter (1959) が提唱した「情動反応の自己評価説」に遡って予想を試みることは可能である。この考え方は、他者と比較することでできれば、自分の情動反応が事態に対して適切であるか否かの評価が可能になり、無用な緊張や不安を低減させることができるというものである。その後、比較対象となる共在他者が知人や友人であったり、自分とおかれている立場が同じ人であったり、援助者であるなど、両者の間に共感的な心理的關係が認められる場合に、共在他者による不安低減効果は最も顕著であるという報告がなされている (Zimbardo & Formica, 1963; Zajonc, 1965; Glass, et al, 1970; Buck & Parke, 1972)。

一方、Friedman (1981) のように、他者の反応を観察できる立場に自分がおかれている場合には、たとえ相手が全く見ず知らずの他者であっても、不安低減効果が認められたとする報告もある。相手の行動や反応を観察できるという立場に立つことそれ自体、不安の低減に有効であることを示唆する結果といえよう。

共在他者の情動反応を観察することは、自分の反応が状況に対して適切であるかどうかといった情動反応の自己評価 (self evaluation) を目的とする場合に他に、自己高揚 (self enhancement) を目的とする場合も考えられる (Grunder, 1977)。自分のおかれている状況を的確に知ろうとする欲求が自己評価であるのに対し、自己高揚は、むしろ自分をより優位に位置づけたいとする欲求である。Grunder (1977) は、新奇な状況に際しては自己評価が重要な目的となるが、脅威事態においては自己高揚がより重要な目的となることを指摘している。Bell (1978) も、親和行動の対象に自分より立場の悪い人を選ぶ傾向が多いという結果を報告している。このような傾向を、Wills (1981) は、「下方比較 (downward comparison) の法則」と名付けている。脅威事態に立たされた個人にとってみれば、自分よりも立場の弱い他者を比較の対象とすることで相対的な優位性を感じ取り、そのことによって、不安感を少しでも和らげようとしているのであろう。

以上の点から考えると、比較対象となる他者の属性に

よって幾分違いはあるとしても、相手を観察できる立場にいたことは、基本的には対人的に有利な立場に立っていると考えてよさそうである。

本研究の目的は、「自分が他者に注意を向け、自分の意識の対象や注意の焦点として他者を意識している時には、他者共在は不安を低減させる。逆に、他者が自分に注意を向け、他者の意識の対象や注意の焦点が自分自身に向けられていることを意識している時には、他者共在は不安を増大させる」という仮説を実験的に検証しようとするものである。

不安喚起事態としては、「ホラー・ビデオ」と「ポルノ・ビデオ」を2人で一緒に見る条件を設定し、立場の違いの操作としては、自分の表情がカメラで写されることで、他者の意識の対象や注意の焦点が自分自身に向けられていることを意識させられる「被観察条件」と、それをモニターテレビで眺めることで他者に注意を向け、自分の意識の対象や注意の焦点として他者を意識することのできる「観察条件」、および、観察、被観察という立場の違いの効果を比較するために、他者との間に衝立がおかれ、単に他者の共在を意識した状況下で、2人同じ条件でビデオを見る「共在条件」を設定した。さらに、統制群として他者共在の効果を比較するために一人でビデオを見る「一人条件」を設定した。

不安喚起刺激として2種類のビデオを用いたのは、異なった刺激によって引き起こされる情動の質的な違いが、観察者・被観察者という立場の違いを増幅したり圧縮したりする可能性をもっているからである。以前の研究において筆者ら（生和・横山・1989）は、ポルノ・ビデオとホワイト・ノイズを刺激として用い、教示によって観察される状況と観察されない状況を設定し、不安反応に及ぼす刺激と状況の交互作用モデルを検討した。その結果、ホワイト・ノイズによって引き起こされる不安反応は、状況の影響を殆ど受けないが、ポルノ・ビデオの場合は、観察されているという教示によって不安が著しく増大することを見いだしている。

具体的な検討に先だち、次の2つの作業仮説を立てた。

- ① 観察条件群は他の条件群にくらべて低い不安反応を示し、被観察条件群は他の条件群にくらべて高い不安反応を示すであろう。
- ② ホラー・ビデオ刺激よりも、ポルノ・ビデオ刺激のほうが、観察・被観察という立場の相違を強く意識させ、そのため不安反応の現れに大きな差異を生じさせるであろう。

方 法

被験者 生理反応を測定する実験とだけ告げて募ったボランティアの女子学生110名。各被験者は実験条件の異なる8群にランダムに振り分けられた。各条件群の被験者数はTable 1に示したとおりである。但し、被験者が実験中に動くなどして心拍データが正確にとれなかった被験者は、Table 1に示すように分析の対象から除外した。

実験日時 昭和63年6月から11月。

実験条件と操作 不安喚起刺激としては、ホラー・ビデオをみせる「HV条件」、ポルノ・ビデオをみせる「PV条件」の2条件、立場の違いを引き出す実験操作としては、「観察条件」「被観察条件」「共在条件」「一人条件」の4条件を設定した。「観察条件」とは、衝立があるため、お互いの様子を直接知ことは出来ないが、モニターテレビを通して共在他人の表情や様子を見ることが出来る立場にある条件、「被観察条件」とは、ビデオカメラによって自分の様子が写され、それを隣に共在他人に見られる立場におかれている条件である。また、「共在条件」とは同じ条件で二人が一緒にビデオを見る条件である。

装置 Fig. 1は実験室の様子を示したものである。被験者が二人の場合は両方の椅子に、一人の場合は椅子Iにのみ被験者は座ることになる。2つの椅子の間は衝立で仕切られ、お互い同士見えない状態になっている。それぞれの椅子の前に、刺激（ビデオ）を呈示するためのモニターテレビを設置した。「一人条件」と「共在条件」

Table 1
Numbers of subjects on each condition

Stimulus video	alone	mere presence	observe	observed
Horror movie	11 (2)	12 (1)	16	16 (1)
Pornography	11 (3)	12 (2)	16 (2)	16 (2)

※ () Numbers of eliminated subjects from analysis.

Fig. 1. Situation of the laboratory.

の実験は、この状況で行なわれた。「観察条件」と「被観察条件」の場合には、観察者側の前にさらにもう一つの小型モニターテレビを置き、被観察者側の前にはビデオカメラ (NATIONAL TOROONE YWV831 CMO02) を設置し、被観察者の顔 (首より上) が観察者の前の小型モニターテレビに映るようにセットした。実験中のビデオ画像の再生には SONY ビデオデッキ SL-HF900 を用い、ビデオ画像の呈示には 2 台のカラーモニターテレビを用いた (一人条件の場合は一台のみ。) 実験中の教示はすべてスピーカーを通して行なった。実験中の心拍率を継続的に測定するため、NEC 三栄ポリグラフ 360 システムを用い、実験の制御ならびに心拍のサンプリングは NEC パーソナル・コンピュータ PC-9801VM を用いて行なった。

反応測定 不安の生理指標として心拍率を用いた。心拍は、第 II 誘導法により導出した瞬時心拍 (bpm) を 1 秒毎にサンプリングした。不安の主観的指標としては、Zuckerman (1960) の AACL の anxiety-plus の形容詞項目から「緊張した」「怖い」「心配な」「恥ずかしい」「落ち着かない」「嫌な」の 6 項目、anxiety-minus の形容詞から「楽しい」「わくわくした」の 2 項目をそれぞれ選び、各項目について「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 10 段階で評定させた。また、二人実験 (「共在条件」・「観察条件」・「被観察条件」) の被験者に対しては、隣人のことが気になった程度を「全く気にならなかった」から「非常に気になった」までの 10 段階で評定させた。

手続き 実験の手続きは以下のとおりである。①被験者を実験室に入室させ、心拍測定用の電極を両手首・両

足首に装着。②実験者が退室し、数分の慣化期間をおいたのち、ベースライン期の心拍を 1 分間測定。③「この実験は、ホラー・ビデオ (ポルノ・ビデオ) を見ているときの心拍を測定するものです」という教示を行う。④実験者が入室し、ビデオカメラやモニターテレビを指定の位置にセットし、被験者の立場の違いを教示する。⑤刺激の呈示の仕方について教示する。具体的には、「テレビ画面に 10 から 0 までの数字が順を追って呈示されます。0 が出たあと、ホラー場面 (ポルノ場面) が映ります。できるだけ体を動かさずに見て下さい。映像が消えた後も、こちらが指示するまで体を動かさずに下さい」と教示する。⑥実験者退室後、合図と共にカウントダウンを開始。カウントダウンは 12 秒間隔で、テレビ画面を注視し始めてから刺激ビデオが呈示されるまでの時間は 2 分間である。⑦ビデオテープは 30 秒間写し、テープを止めた後、30 秒間はそのままの状態を維持させた。但し、不安の生理指標として分析に用いたのは、カウントダウン開始から刺激呈示までの 2 分間の予定期間中の心拍データである。⑧実験の終了を告げたのち、実験中の主観的不安度 (AACL) や隣の人が気になった程度などを質問紙に回答させた。⑨質問紙回答後、再び心拍を 1 分間測定したのち、電極を着脱。⑩内省報告を聞き、実験を終了した。

データの処理・分析 不安の生理指標である心拍の分析に際しては、安静時心拍における個人差を除去するため、入室後測定したベースライン期の平均値 (M) と標準偏差 (SD) をもとに、実験セッション中の各心拍データ (X_i) を変換して得点 (Z_i) を算出し、これを分析の対象とした。変換式は次のとおりである。 $Z_i = 10 \times (X_i - M) / SD + 50$ 。なお、本実験では他者共在が不安に及ぼす効果を検討するという目的に合わせ、予定期間 2 分間のデータのみを分析の対象とした。ビデオ視聴期間や回復期間中のデータについては、実際のビデオ映像の刺激価が影響していると考えられるので、今回は検討の対象から除外した。不安の主観的指標である AACL は、anxiety-minus の 2 項目については得点値を逆転させて ($X = 11 - X$)、anxiety-plus の 6 項目と合わせ 8 項目の合計得点を算出し、これを分析の対象とした。また、用いた 2 種の刺激の性質の違いを検討するために各項目別の検討も行なった。分析は、まず、不安に及ぼす他者共在の影響を検討するために、刺激 2 条件 (HV, PV) と立場 2 条件 (「共在条件」「一人条件」) の 2 要因分散分析を行い、次いで、共在様式の違いが不安に及ぼす影響を調べるため、刺激 2 条件 (HV, PV) と立場 3 条件 (「観察条件」「被観察条件」「共在条件」) の 2 要因分散分析を

行った。なお、下位検定には多重比較を行うため Ryan 法を用いた。

結 果

1. 一人条件・共在条件と情動喚起刺激の違いが心拍率に及ぼす影響

Fig. 2 は、予期期間中の平均心拍率 (Z 得点) を各条件群別に示したものである。刺激の違い (2 水準) と立場の違い (2 水準) を要因として 2×2 の 2 要因分散分析を行い、Ryan 法により各条件群間の比較を行った。Fig. 2 を見ると、PV 条件下での心拍率が HV 条件のそれとくらべ若干高く、また、HV 条件下では「一人条件」の心拍率 ($\bar{X}=69.1$, $SD=13.45$) の方が「共在条件」の心拍率 ($\bar{X}=65.4$, $SD=9.11$) よりも高く、PV 条件下では「共在条件」の心拍率 ($\bar{X}=76.9$, $SD=16.54$) の方が「一人条件」($\bar{X}=74.8$, $SD=15.64$) の心拍率よりも高くなっているように見える。しかし、統計的に有意な差は認められず、他者が「単なる共在者」としている限り、「一人条件」と「共在条件」の心拍率に基本的な違いはないと考えてよい。

2. 一人条件・共在条件と情動喚起刺激の違いが不安の主観指標に及ぼす影響

Fig. 3 は、予期期間中の各条件群の主観的不安の程度を AACL 不安得点の平均値で示したものである。HV 条件下では「一人条件」の得点 ($\bar{X}=47.2$, $SD=9.88$) の

方が「共在条件」の得点 ($\bar{X}=44.6$, $SD=12.32$) よりも高く、PV 条件下でも同様に、「一人条件」の得点 ($\bar{X}=46.9$, $SD=14.54$) の方が「共在条件」の得点 ($\bar{X}=45.5$, $SD=5.62$) よりも高くなっているようにみえる。主観的不安の程度に関しても、心拍率の場合と全く同様で、「一人条件」と「共在条件」との間には、統計的に有意な差は認められなかった。また、HV 条件と PV 条件下での不安の程度も殆ど同じで、刺激の違いによる主観的不安度にも差は認められなかった。

3. 他者共在の様式の違いと情動喚起刺激の違いが心拍率に及ぼす影響

Fig. 4 は、予期期間中の平均心拍率 (Z 得点) を各条件群別に示したものである。HV 条件下では、「被観察条件」での心拍率 ($\bar{X}=69.3$, $SD=17.68$) が最も高く、次いで「共在条件」($\bar{X}=65.4$, $SD=9.11$) であり、最も低いのは「観察条件」($\bar{X}=56.5$, $SD=10.12$) である。PV 条件下でも同様に、心拍率が最も高いのは「被観察条件」($\bar{X}=93.4$, $SD=16.88$) であり、次いで「共在条件」($\bar{X}=76.9$, $SD=16.45$)、観察条件」($\bar{X}=65.0$, $SD=11.28$) となっている。

Table 2-a は、刺激の違い (HV・PV) と立場の違い (観察条件・被観察条件・共在条件) を要因として 2×3 の 2 要因分散分析を行った結果を表示したものである。また、Table 2-b は、Ryan 法により各条件群間の比較を行った一覧表である。

分散分析の結果、刺激と立場それぞれに主効果が得ら

Fig. 2. Means of Heart Rate (z) of each group.

Fig. 3. Means of AACL-score of each group.

れ、HV より PV を見る場合のほうが心拍は上昇し、また、立場の違いによって心拍率に大きな違いのあることがわかった。観察条件より共在条件の心拍率が幾分高く、共在条件より被観察条件の心拍率がさらに高くなる傾向が認められる。共在条件を基準にするならば、観察条件は心拍率を低下させ、被観察条件は逆に心拍率を上昇させる機能を持っていると考えてよいだろう。下位検定の結果をみると、「PV/被観察条件群」と他の全ての条件群との間には有意な群間差は認められるものの、それ以外に有意差が認められたのは「HV/観察条件群」と「PV/共在条件群」の間のみであった。「PV/被観察条件群」の心拍率が有意に高いことが、PV および被観察条件群の心拍を相対的に上昇させた主な原因と考えられる。

4. 他者共在の様式の違いと情動喚起刺激の違いが不安の主観指標に及ぼす影響

Fig. 5 は、予期期間中の各条件群の主観的不安の程度を AACL 不安得点の平均値で表したものである。HV 条

Fig. 4. Means of Heart Rate (z) of each group.

Table 2-a
Analysis of Variance of Heart Rate (Z)

Source of variation	SS	df	MS	F	p
FACTOR A (stimulus)	4202.500	1	4202.500	21.397	**
FACTOR B (situation)	5520.000	2	2760.000	14.053	**
A * B INTERACTION	879.812	2	439.906	2.240	ns
ERROR	14533.800	74	196.402		

** $p < .01$

Table 2-b
Multiple Comparisons of Heart Rate by RYAN's Method

Condition	Horror /Observe	Porno /Observe	Horror /Mere pres.	Horror /Observed	Porno /Mere pres.	Porno /Observed
Horror/Observe		1.649	1.614	2.535	3.591* ($\alpha' = .00417$)	7.141** ($\alpha' = .00007$)
Porno/Observe			0.071	0.827	2.038	5.317** ($\alpha' = .00008$)
Horror/Mere presence				0.702	1.866	4.917** ($\alpha' = .00011$)
Horror/Observed					1.314	4.581** ($\alpha' = .00017$)
Porno/Mere presence						2.816* ($\alpha' = .01667$)

** $p < .01$ * $p < .05$

Fig. 5. Means of AACL-score of each group.

件下では「被観察条件」の得点 ($\bar{X}=55.6$, $SD=8.24$) が最も高く、次いで「共在条件」($\bar{X}=44.6$, $SD=12.32$) であり、「観察条件」($\bar{X}=31.5$, $SD=8.31$) が最も低くなっている。PV 条件下でも同様に、得点が最も高いのは「被観察条件」($\bar{X}=66.4$, $SD=8.03$) であり、次いで「共在条件」($\bar{X}=45.5$, $SD=5.62$)、「観察条件」($\bar{X}=34.4$, $SD=8.82$) となっている。

Table 3 は分散分析の結果を示したものである。分散分析の結果、刺激要因と立場要因それぞれに主効果が得られ、HV より PV 条件下での不安度が高く、また、共在様式の違いにより不安の程度も異なることが統計的にも確認された。この点は心拍率の場合とほぼ同様な結果といえよう。特に、共在様式の違いによる群間差は顕著で、「観察条件」での不安が最も低く、次いで「共在条件」、最も不安が高いのは「被観察条件」という順になっている。この傾向は HV, PV いずれの刺激条件下においても共通してみられる現象である。同じ立場で嫌悪刺激の到

来を待つ「共在条件」を比較の基準とするならば、共在他人の様子を観察することの可能な「観察条件」は不安を低減させ、逆に、自分の表情や態度が共在他人によって観察される「被観察条件」は不安を高めるといえよう。

刺激の違いが不安反応に及ぼす効果については、刺激の主効果は認められたものの、下位検定の結果、HV と PV との間に有意な差が認められたのは「被観察条件」においてのみであり ($\alpha=.01667$, $t=3.273$, $df=27$, $p<.01$)、「観察条件」と「共在条件」のいずれにおいても、HV と PV との間に有意な差は認められなかった。つまり、同じ様な嫌悪刺激呈示状況下におかれていても、刺激の違いによって他者共在の不安に及ぼす影響の違いが生じるのはあくまで自分の情動反応が共在他人によって「観察される」場合に限定されていると考えてよいだろう。

ところで、同じ主観的不安度で表されるとしても、HV と PV とでは、「被観察条件」において引き起こされる情動の性質にかなりの違いがあることが予想される。Fig. 6 は、主観的不安尺度を構成している AACL-anxiety plus の各情動項目について、HV と PV それぞれの「被観察条件」における評定値の平均値を比較したものである。

「恐い」の項目では、PV 条件 ($\bar{X}=4.4$, $SD=3.37$) よりも HV 条件 ($\bar{X}=5.8$, $SD=1.97$) の評定値の方が高くなっているものの、有意な差はみられなかった。それ以外の「緊張した」(PV 条件 ($\bar{X}=9.1$, $SD=0.80$), HV 条件 ($\bar{X}=7.7$, $SD=1.25$); $t=3.458$, $df=27$, $p<.01$), 「心配な」(PV 条件 ($\bar{X}=8.0$, $SD=1.51$), HV 条件 ($\bar{X}=4.9$, $SD=2.17$); $t=4.227$, $df=27$, $p<.001$), 「恥ずかしい」(PV 条件 ($\bar{X}=9.0$, $SD=1.25$), HV 条件 ($\bar{X}=6.4$, $SD=1.74$); $t=4.422$, $df=27$, $p<.001$), 「落ち着かない」(PV 条件 ($\bar{X}=8.1$, $SD=1.51$), HV 条件 ($\bar{X}=5.8$, $SD=1.68$); $t=3.805$, $df=27$, $p<.001$), 「嫌な」(PV 条件 ($\bar{X}=8.1$, $SD=1.81$), HV 条件 ($\bar{X}=6.3$, $SD=1.57$); $t=2.886$, $df=$

Table 3
Analysis of Variance of AACL-score

Source of variation	SS	df	MS	F	p
FACTOR A (stimulus)	463.047	1	463.047	6.078	*
FACTOR B (situation)	10237.400	2	5118.700	67.190	**
A * B INTERACTION	348.234	2	174.117	2.286	ns
ERROR	5637.520	74	76.183		

** $p<.01$ * $p<.05$

27, $p < .01$)の5項目では、HV条件よりもPV条件の評
定値の方が、有意に高くなるという結果が得られた。

考 察

本実験から得られた結論は、およそ以下の3点にまと
めることができる。

第1は、他者共在の不安反応に及ぼす影響は、他者が
単に共在しているのではなく、他者との共在様式に
よって規定される両者の立場の相違によって影響される
という点である。

Friedman (1981) は、一人条件、単なる共在条件、互
いに相手が観察できる条件、相手を自分だけが観察でき
る条件の4条件のもとで、他者共在の不安に与える影響
を検討した。その結果、単なる他者の共在は、不安を低
減させないが、相手をみることができるという条件下で
は、不安が低減したと報告している。同様に、単なる他
者の共在は、不安を低減させないことを支持する報告は
多い (Hake, Powell & Olsen, 1969; Latane, 1969;
Latané & Glass, 1968; Zajonc, Heingartner & He-
man, 1969)。

本実験の結果でも、一人条件と共在条件の間には、
HRにおいてもAACLにおいても差がみられず、衝立で
仕切られた反対側に他者が単に共在していることは、不
安の低減にとって全く影響はなく、基本的には一人条件
とあまり違いが認められなかった。

従来の研究でも、他者共在が不安の低減に影響を及ぼ
すのは、共在他者が友人や知人や援助者があつたり

(Kissel, 1965; Glass, et al, 1970; Buck & Parke,
1972), 共在他者が自分と同じ立場である (Zimbardo &
Formica, 1963; Zajonc, 1965) といったように、両者の
間に親和性の高い、あるいは心理的な距離が近いといっ
たような密接な心理的な関係が認められた場合に限られ
ているとする報告が多い。他者との共在様式の違いに
よって、両者の間に特定な心理的な関係が成立しえない
場合には、他者共在は不安を低減させないものと考えら
れる。

第2は、共在する他者の様子を「観察できる」という
能動的な立場に立つことができる場合には、他者共在は
不安低減の方向に機能し、逆に、自分の様子が共在他者
によって「観察される」という受動的な立場に立たされ
た場合には、他者共在は不安を高める方向に機能する
という点である。

意識や注意が自分自身に向けられたときには、自己を
意識の客体と捉える客体的自覚の状態となるのに対して、
意識や注意が自分の外に向けられたときには、自己を行
為の主体と感じる主体的自覚の状態となると Duval &
Wicklund (1972) は報告している。本実験事態のよう
に、VTRモニターを通して相手を見るという事態では、
観察者の立場に立つことで、観察者の意識の対象や注意
の焦点は自己から離れ、被観察者に向くことによって、
観察者は主体的自覚の状態に立ち易い事態であると考え
られる。

また Wills (1981) は、下方比較の理論を提唱し、人は
具合の悪い状況におかれたとき、自分より立場の弱い
者と比較することで、不安を少しでも和らげようとす
ると述べている。さらに、自分を単に立場の弱いものと比
較するだけでなく、他者を自分より弱い立場におこうと
試み、積極的に他者との間の心理的距離を広げようとす
るとも述べている。不安喚起場面で、しかも「観察でき
る」「観察される」というように二人の立場が異なるよう
に操作されている本実験事態は、下方比較を行い易い状
況であると考えることができる。「観察できる」「観察さ
れる」といった立場の違いは、両者の間の心理的距離を
広げ、観察者の立場にある者にとって、自分の相対的な
優位性を確認させることになるだろう。自分の対人的優
位性を確保するために下方比較を行うことで、観察者の
意識の対象や注意の焦点は、自己から離れ、他者に向け
られることになる。その結果、観察者は、主体的自覚の
状態に立つことができるであろう。観察条件の被験者は、
主体的自覚の状態に立ち、被観察者を客体として捉える
ことで、相対的な優位性を感じることができ、その結果、
不安が低減したものと考えられる。

Fig. 6. Means of AACL-anxiety plus items of each group.

一方、被観察者の立場におかれた場合には、意識の流れや注意の焦点が自分自身に向けられ客体的自覚の状態におかれていることになる。客体的自覚の状態におかれた個人は、他者によって観察されたり評価されたりしている自分の姿に意識を向けることになるであろう。とりわけ、不安喚起状況下で共在他者によって観察されるという本実験事態では、自分の満足とは程遠い自己イメージを他者に与え、他者からの好意的とはいえない評価を受けることを予測させる。そのため、どうにかして他者に好ましいイメージを与えようとして、他者の目に曝されている自分の姿に一層強く注意や意識が向けられることになるであろう。その結果、公的自覚の状態 (Buss, 1980) におかれることとなり、自分に対する他者の反応が気になり不安は増加するものと考えられる。本実験にみられる「被観察条件」での高い不安水準は、嫌悪刺激によって喚起された不安に加えて、公的自覚の状態によって喚起された不安の影響によるものと考えられる。

第3は、同じ不安喚起事態であっても、予想される脅威刺激や脅威事態の性質によって引き起こされる主情動が異なり、その情動の質的な違いが「観察される」状況下での不安反応の程度にかなりの影響を及ぼす可能性があるという点である。

Sarnoff & Zimbardo (1961) と Buck & Parke (1972) は、引き起こされる情動の質的な違いによって他者の共在効果が異なると仮定し、恐怖を引き起こす電撃到来事態と不安を喚起させるおしゃぶり行動要求事態での他者共在の効果を検討した。その結果、他者共在は、電撃事態では恐怖低減の方向に、おしゃぶり事態では不安増大の方向に、それぞれ作用することがわかったと報告している。生和・横山 (1989) は、不安の喚起を刺激誘発型と状況誘発型の2つに分け、ホワイト・ノイズの到来予期によって引き起こされる不安が刺激誘発型であるのに対し、ポルノ・ビデオ視聴により引き起こされる不安は状況誘発型の不安であり、他者共在の影響を受け易いのは状況誘発型の不安であると推定した。他者共在の効果は、設定された脅威事態の違いによって、あるいは、引き起こされる情動の質の違いによって、かなり異なるものと考えられる。

本実験の結果でも、AACLの下位項目別にみると、PV条件では「恥ずかしい」がHV条件での評定よりも有意に高い値を示し、刺激そのものを恐れるというより、戸惑い・困惑している自分の反応が共在他者の目に曝されることを嫌がる傾向が強いことがわかった。

「恥ずかしい」といった情動は、「自分の反応を他者にみられ、評価されている」という意識の下で生じるもの

で、対人場面における不安に共通するものであると思われる。Schwarzer (1986) は、シャイネスや当惑感 (embarrassment) は、恥 (shame) や聴衆不安 (audience anxiety) などと共に、対人不安 (social anxiety) の範ちゅうに入れて考えることができると述べている。この点を考え合わせると、PV条件での他者共在による不安の増大は、多分に対人不安成分の作用によるものと判断することができよう。

しかし、「自分の反応を他者にみられ、評価されている」という意識が、常に対人不安と結び付いているわけではない。Fish, et al (1978) は、他者共在の効果の違いは、脅威事態や喚起された情動の質の違いと結び付けるよりも、他者から受ける社会的報酬 (social rewards) の違いによるものと見なす方が適当であろうと考えている。つまり、おしゃぶり行動の場合は、当惑感や羞恥心に加え、行動することによって予想される他者からの軽蔑や侮蔑といった負の社会的報酬を受ける可能性が高いと判断したため、不安が増大したのであろうと推察している。彼らは、「他者からの正の社会的報酬が期待される場合には、他者共在は不安を低減させ、逆に、社会的処罰を受けることが予想される場合には、他者共在は不安を増大させる」と結論づけている。

Buss (1983) は、人が他者との共在を好むのは、敬意・賞賛・共感・愛情・受容といった社会的報酬を受ける可能性が高いからであると考えている。他者を社会的報酬を与えてくれる強化者として意識すればするほど、その他者との共在が好まれることになる。知人・友人・家族など自分と親和的關係にある他者 (significant others) が共在他者として好まれるのは主にそのためであろう。もちろん、社会的報酬は決して無条件に与えられるものではない。社会的交換理論 (Thibaut & Kelly, 1959) によれば、社会的報酬を得るためには、それに見合う行動が当然要求されることになる。もしこれに失敗すれば、社会的報酬が受けられないだけでなく、軽蔑・非難・侮蔑・拒否といった社会的処罰を受けることになる。

他者共在が不安や緊張を高めるのは、共在他者が社会的報酬を与えてくれる正の強化者ではなく、社会的処罰を与える負の強化者として意識される可能性が高い場合に限られているのかも知れない。この点は、今後、詳しく検討してみる必要があると思う。

要 約

本研究の目的は、「自分が他者に注意を向け、他者を自分の客体として意識している時には、他者共在は不安を

減少させる。逆に、他者が自分に注意を向け、自分を他者の客体として意識している時には、他者共在は不安を増大させる」という仮説を実験的に検証することである。被験者は女子大学生110名である。不安喚起刺激には「ホラー・ビデオ」と「ポルノ・ビデオ」を用いた。被験者は「ホラー・ビデオ」あるいは「ポルノ・ビデオ」が呈示される条件のもとで、次の立場の異なる4条件の中のいずれか一つの条件で実験を受けた。実験条件は不安喚起刺激に曝されている自分の表情がモニターテレビを通して他者に観察される「被観察条件」と、それをモニターテレビを通して観察することができる「観察条件」、および衝立で仕切られた部屋で2人の被験者がビデオを見る「共在条件」及び一人でビデオを見る「一人条件」である。不安の測度としては、生理指標として心拍率と、主観的指標としている簡易版 AACL を用いた。

本実験の結果、以下の3点のことがわかった。1) 他者の不安反応に及ぼす影響は、単に他者が共在していることではなく、他者との共在様式に規定される両者の立場の相違によって影響される。2) 他者共在は、自分が他者を「観察できる」という能動的立場にある場合には不安を低減させる効果を持つが、「観察される」という受動的立場にある場合には逆に不安を高める。3) 脅威刺激や脅威事態の性質の違いによって引き起こされる主情動が異なり、その質的な違いが「観察される」状況下での不安反応の程度に影響を及ぼしている。

引用文献

- Bell, P. A. 1978 Affective state, attraction, and affiliation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 616-619.
- Buck, R. W., & Parke, R. D. 1972 Behavioral and physiological response to the presence of a friendly or neutral person in two types of stressful situation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 143-153.
- Buss, A. H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- Ellsworth, P. C., Carlsmith, J. M., & Henson, A. 1972 The stare as a stimulus to flight in human subjects: A series of field experiments. *Journal of personality and Social Psychology*, 21, 302-311.
- Fenigstein, A. 1979 Self-consciousness, self-attention, and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 75-86.
- Fish, B., Karabenick, S., & Heath, M. 1978 The effects of observation on emotional arousal and affiliation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 14, 256-265.
- Friedman, L. 1981 How affiliation affects stress in fear and anxiety situations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 1102-1117.
- Glass, D. C., Gordon, A., & Henchy, T. 1970 The effects of social stimulation psychophysiological reactivity to an aversive film. *Psychonomic Science*, 20, 255-256.
- Greenbaum, P., Rosenfeld, H. W. 1978 Patterns of avoidance in response to interpersonal staring and proximity: Effects of bystanders on drivers at a traffic intersection. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 575-587.
- Grunder, C. L. 1977 Choice of comparison persons in evaluating oneself. In Suls, J. M., & Miller, R. L. (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives*. Washington, D. C.: Hemisphere.
- Hake, D. F., Powell, J., & Olsen, R. 1969 Conditioned suppression as a sensitive baseline for social facilitation. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 12, 807-816.
- Ickes, W. J., Wicklund, R. B., & Ferris, C. B. 1973 Objective self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, 9, 202-219.
- Innes, J. M., & Young, R. F. 1975 The effect of presence of an audience, evaluation apprehension and objective self-awareness on learning. *Journal of Experimental Social Psychology*, 11, 35-42.
- Kissel, S. 1965 Stress-reducing properties of social stimuli. *Journal of Personality and Psychology*, 2, 378-384.
- Latane, B. 1969 Gregariousness and fear in laboratory rats. *Journal of Experimental of Social Psychology*, 5, 61-69.
- Latane, B., & Glass, D. C. 1968 Social and non-social attraction in rats. *Journal of Personal-*

- ity and Social Psychology, 9, 142-146.
- Leary, R. B. 1982 In L. Wheeler (Ed.), *Review of personality and social Psychology* (vol. 3). Beverly Hills: sage.
- Leary, M. R. 1983 *Understanding social anxiety*. Beverly Hills: sage. 生和秀敏(監訳) 1990 対人不安, 北大路書房.
- Leary, M. R., & Schlenker, B. R. 1981 The social psychology of shyness: A self-presentational model. In J. T. Tedeschi (Ed.), *Impression management theory and social psychological research*. New York: Academic Press.
- Liebling, B. A., & Shaver, P. 1973 Evaluation, self-awareness and task performance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 9, 297-306.
- Sarnoff, I. & Zimbardo, P. G. 1961 Anxiety, fear and social affiliation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62, 356-363.
- Sartre, J. P. 1943 *L'être et le néant. Essai d'ontologie phénoménologique*. Paris: Gallimard. 松浪信三郎(訳) 1965 存在と無, 世界の大思想 29 サルトル, 河出書房.
- Schachter, S. 1959 *The psychology of affiliation*. Stanford: Stanford University Press.
- Schlenker, B. R., & Leary, M. R. 1982 Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.
- Schwarzer, R. 1986 *Self-related cognitions in anxiety and motivation*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 生和秀敏・横山博司 1989 不安の交互作用モデルについての実験的検討—刺激・状況・特性の不安反応に及ぼす影響—, 行動療法研究, 15(1), 1-12.
- Strom, J. C., & Buck, R. W. 1979 Staring and participants' sex: Physiological and subjective reactions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 5, 114-117.
- Thibaut, J. W., & Kelley, H. H. 1959 *The social psychology of groups*. New York: John Wiley.
- Wicklund, R. A. 1975 Objective self-awareness. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 8.) New York: John Wiley.
- Wills, T. A. 1981 Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, 76(2), 245-271.
- Zajonc, R. B. 1965 Social facilitation. *Science*, 149, 269-274.
- Zajonc, R. B., Heingartner, A., & Herman, E. M. 1969 Social enhancement and impairment of performance in the cockroach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 13, 83-92.
- Zimbardo, P. G. & Formica, R. 1963 Emotional comparison and self esteem as determinations of affiliation. *Journal of Personality*, 31, 141-162.
- Zimbardo, P. G. 1977 *Shyness: What it is and what to do about it*. New York: Jove. 木村駿・小川和彦(訳), シャイネス I 内気な人々, II 内気を克服するために, 頸草書房.
- Zuckerman, M. 1960 The development of an affect adjective check list for the measurement of anxiety. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 457-462.

(1991年1月18日 受稿)
(1991年6月4日 受理)